

---

# ゼロから始まるアラストル～処刑詩

七色四季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロから始まるアラストル〜処刑詩

### 【Nコード】

N7264I

### 【作者名】

七色四季

### 【あらすじ】

お前の母親を犯し、殺し、子宮を食らった…少年は全て失う…

情性を繰り返す何もない毎日を送る平凡な少年 レオン

レオンは日課の『探検』に出かけると、黒のスーツを着る女性と出会う。

彼女は魔術師 綾咲碧

彼女の目的は魔術協会の情報を横流しするライカンの処刑。

そして、レオン・・・

そんな、彼女との出会いがレオンの情性を壊す

## プロローグ

世界は鏡の世界のように、2つに分割されていた。

1つは同じ事を繰り返すだけの平凡な世界。

この世界では普通の人間が住み、『始<sup>ハジマリ</sup>』と呼ばれている。

対になるもう1つの世界は『零<sup>ゼロ</sup>』と呼ばれ、非日常が存在する世界。

2つの世界の間には扉が存在し、お互いに世界の均衡を崩さないため、扉によって両の世界を隔てている。しかし、扉は壊され、世界が壊れかけた歴史が存在した。

それはある1人の魔術師が、『王』と呼ばれる魔神を召喚した事から始まった。

『王』を召喚した後。

『零』の世界の限られた人間だけしか、開けない扉を魔術師は『王』に無理矢理壊させたのだ。

それによって何十年、何百年も築き上げた世界の均衡は崩れ、次元が歪み、2つの強い世界が浸食しあい、世界は壊れるはずだったのだが……

浸食し合ってたはずの『零』と『始』の世界が共鳴してしまい、2つの世界は1つに交じる事に舵は流れた。

本来ならどちらかの世界が壊れ、二つあるものが一つになるはずなのだ。

だが、偶然にも共鳴してしまい、このままでは非日常と日常の集合体が完成してしまう。

この現象はいわゆる世界の死を意味する。

その世界崩壊を防ぐために『始』と『零』の扉を護り続けてきた、11人の上級白魔術師達と処刑人が終焉を止める為に立ち上がったのだ。彼ら処刑人は黒幕となる魔術師を処刑し、『王』は白魔術師達が『珀鍊<sup>ハクレン</sup>』と呼ばれる、白魔術最強の宝玉の中に封じ永遠の眠

りにつかせた。

そして、彼らは『王』が封印され壊された扉を再構成し、最悪の状況の世界崩壊は防いだ。

だが、零が半分交ざり合ってしまい世界は個々別にならず、共鳴してしまい世界は混乱し、壊れていくばかりだった。

それを考慮して、『始』にある『零』の世界の部分だけ、魔術協会が抹消したのだ。しかし、全てが消えたわけではなく、残りの『零』の世界の半分が『始』に完全に交わってしまい、新しい世界が創成したのだ。

この出来事は『始』の世界では何事も無かったように処理され、その歴史は永遠に葬られた。

今の世界においては文明が発達し、半分だけ交わった『零』の世界の陰りは一切何もなく、奇跡的にも、世界は壊れず平凡な毎日が続いていた。

『零』の住人も『始』の世界にひっそりと身を潜め、静かにかつ順調に世界はまわっていたが、平凡な毎日は長くは続かなかった。

そう。一部の『零』の世界にいる者は半分に共鳴した世界に反乱を起し、『王』を『珀鍊』から解放させようとし新しい世界を改革しようとしたのだ。

そして、また戦争は始まる。

\*\*\*

とある大企業の高層ビルの最上階。

ある1人の黒スーツを着た女性が、社長椅子に堂々と座る女性と話していた。

「新しい依頼ですか？社長」

「ああ。そういえば、この前の大統領の護衛ご苦労だったな」

「はい、やはり『始』の人間には任せられないですね」

くすつと女社長は笑みを浮かべた。

「まあ、報酬は振込んどいたからな」

「はい。それで本題はどうなったんですか!？」

怪訝そうな顔で黒スーツを着た女性は、女社長に眉を釣り上げて述べる。

「忘れてたな。今回の依頼はこの男を処刑してもらう」

ぱっと出したA4サイズの写真を机の上に置く。

「人間ですか？」

「半分はな……」

「処刑する目的は何ですか？」

「魔術協会の情報を奴らに売ってるネズミ野郎と口封じでそいつの家族の処刑だ」

大きな瞳をより一層開け、動揺を隠しもせず純粹に黒スーツの女性は驚愕する。

「分かりました。他には」

「ああ。もしも……」

「もしも？」

「もしもガキが居たとしても殺せ。それがそいつの為にもなるしあたし達も面倒にならない」

「分かりました」

冷めた瞳を浮かべ冷めた声でそう呟いた

「終わり次第連絡しろ」

「分かりました。社長」

ブラインドを開けると明け方の淡い青の空が広がっていた。

情性（前書き）

幼い頃の拙い記憶

おじさん、誰？

君の親さ

僕は誰にも愛されていないから、親なんていないよ

・  
・  
・  
・  
・  
・

名前は？

レオン  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.

## 情性

遠い昔の記憶だ。

それは、俺がこの世界に来た理由。

戦う理由。

愛した血の繋がらない姉と出逢った理由。

些細な出会いだっただ。

\*\*\*

年齢は10歳程の黒髪の少年。

彼は今、茶色の汚い作業服を着て、鼻歌混じりに山道を歩いている。

これは、少年の日課の『探検』だ。

彼はいつも、自身の家の牧場の仕事が終わるといつも、山に行く。

それは、回りに興味を示す物がないのが原因かも知れない。

ゲームや友達。彼はこの類いの物に出逢った事がない。

だから、暇潰しも兼ねて毎日ここへ来る。

「何か面白いものないかな？」

辺りを見渡す。すると、樹齡何百年と言われる大木が少年の視界に入る。

「今日も元気だね長老」

少年は笑顔でそう言う。

小さく会釈も加えた後、そこを立ち去るとした。

「ッ!」

思わず、少年は足を長老の樹木の根に、足を引っ掛けてしまったのだ。

足には痛々しく血が流れる。

「うつ…何でこんなに大きいんだよ……」

「あははは。偉いぞ少年!よく泣かなかったわね」

「えっ!?!木が話した!」

「…………上よ」

上を見上げると黒い髪を肩まで流し、黒の上下スーツに白いネクタイを締め、茶色のトランクを持った女性が木の太い枝に座っている。

「うわ！どうやって登ったの？」

「そんなことより膝を擦り剥いてるわよ」

「大丈夫！痛くないもん」

### 情性 3

「ッ！」

少年がそう言つと、碧は目を見開く。

「少年がこいつの・・・」

「そんなことより、名前おしえてよ」

「え、あ・・・私の名は綾咲碧アヤサキミドリと言つぞ」

我に返り、碧は驚いたように返答する。

「僕の名前はレオンだよ」

\*\*\*

次の日の朝。 天気は快晴

レオンは牧場の仕事に行き、家畜に餌をやる父親に碧さんの話を話してみた。

すると、もちろん父親は知らん顔。

当たり前だ。作業服の男が高そうなスーツを着た美人な女と会う意味はない。

牧場の仕事が終わると父親は挙動不審な行動が目についたが、そんなことはどうだっていい。

いまは、とにかく昨日会った魔術師のお姉さんと話がしたいただ、それだけ。

「ごちそうさまでした！」

レオンは朝食をすぐに平らげると、作業着のまま探検に行く準備をする。

「今日も探検に行くの?」

「うん!」

「山は危ないんだから気をつけなさいよ」

綾咲碧に会おうとしているのだ。

次、会う日など決めてもいなければ、約束もしていないのに会えるような気がするという不適格な勘でここまで来た。

「碧さん!!! いますか?」

声を上げても返ってくるのは木々の葉のざわめきと、小動物の鳴き声。

「やっぱり、いないや。」

### 情性3

諦め帰ろうとした時、重い風圧がレオンに圧しかかる。

「おい！レオン！！」

「あつ！碧さん！」

碧は箒に乗りゆっくりと地面に下降する。

下降するたびに風圧が周りに伝わり木々達がざわめく。

「どつ？.凄いでしょ？」

「うん！！！！」

「レオンも乗ってみるかい？」

「えっ！？本当？」

「勿論よ」

地面に降り立ちレオンはすぐさま碧に寄り、前に乗る。

すると、もぞもぞとレオンが身じろぎを始める。

「ん？どしたのレオン？」

レオンは顔を赤くし、押し黙る。

「な、な．．．んていうか、その．．．」

「？」

「碧さんの．．．む、胸が．．．背中に．．．」

言い切ると顔は真っ赤になり、碧に見えないように顔を伏せた。

「うっうっう」

「ひゃああああああ」

思わず奇声をあげてしまい、ますます追い詰められてしまうレオン。

「なあーにをやめてほしいのかなかなー？」

「うう」

泣きそうなレオンに対し、碧は意地悪く笑う。

「ウソウソ、ほらちゃんとつかまりなさい」

碧とレオンの周りに魔法陣が描かれ、淡い光が放出される。

「行くわよー！ー！ー！」

ロケットを発射するような、スピードで風を切り、風圧など関係ないかのような速度で空を舞う。

「み、碧さん！」

「あはは。大丈夫大丈夫」

箒に乗っている二人は地面から平行に飛ぶ。

客観的に見たらまるで、流星が流れてるかのような速度に、見えなくもないかもしれない。

## 情性 4

「見てごらん。レオン」

スピード違反を越えた筈は、一度、空に停空し碧は細い指を辺りに指す。

「うう、む、胸が……」

「そっちかい……」

筈の上から見る世界は絶景だった。

山の木々は緑と淡い黄が混ざり春の始まりを教え、薄ら見える小さな川は光の反射で硝子が光っているかのような、美しさが溢れた世界に変わる。

「碧さんはいつも魔法を使って筈に乗ってるの？」

怖がりながらも、胸に意識がいきつつ言った。

「・・・ガソリン代の節約にもなるしね・・・」

「・・・」

苦笑いを浮かべるレオン。

「それよりも『魔法』って言うのはね魔力を扱える力と精神力が必要なのよ」

「う、うん……………」

「それに魔法の原理としては自然と一体になる力も重要となるのよ」

「……………」

難しい事を言われ、とうとう黙り込み頭の上に大量のクエスチオンマークが飛び交う。

「極端な話、心の力と自然とかと仲良くなる事よ」

「あつ！そういう事が！！！」

クエスチョンマークが解消され、モヤモヤした頭の中が一瞬で解決される。

その嬉しさのあまり顔に笑みを浮かべる。

どうやら、レオンは理解する力が乏しいようだ。

二人が乗った筈は流星群の星の1つのような速度で飛び大きく広がる雲の中に消えていった

## 情性 5

\*\*\*

「碧さん！！今日は箒に乗せてくれてありがとう！！！！また、乗せてね」

「そんなに、私の胸がよかったのかい？」

顔を赤くし、黙るレオン。

「正直に言わないと乗せないよー」

「は．．．．い」

「ん？なんだって？？」

意地悪く、聞き返す碧。

「碧さんの．．．胸は落ち着きます．．．」

「よろしい」

「あつ」

レオンのデコにピンッと細い指を当て、意外と痛かったらしく、レオンはデコを押さえる。

「明日も誘うから、レオンは家にいなさい。お父さんと一緒にね」

父親と一緒にの意味がいまいち、分からなかったがレオンは納得した。

「わかったー」

碧は頭をグシグシと撫で、箒に跨がりふわりと宙に浮く。

「また、明日ね。レオン」

「うんー!!」

そう言つと碧は暁の空に消えていく。

初めて体験した魔法に感銘を受けるばかりだった。

疲れながら家路についた時、母親は夕食を作って父親は家でテレビを見ている。

帰って来た時、母親や父親に何か言われた気がするが、疲れきって適当に流すだけ。

遊び疲れ風呂も夕食もとらずにベッドの中で、深い眠りに墜ちる。

次の日の朝。

空は曇り小雨がポツポツと降り気温は少し低かった。

「あつ!!」

仕事の時間をはるかに寝坊し、レオンは大急ぎで作業着を着がえる。

## 情性 5

\*\*\*

「碧さん！！今日は箒に乗せてくれてありがとう！！！！また、乗せてね」

「そんなに、私の胸がよかったのかい？」

顔を赤くし、黙るレオン。

「正直に言わないと乗せないよー」

「は．．．．い」

「ん？なんだって？？」

意地悪く、聞き返す碧。

「碧さんの．．．胸は落ち着きます．．．．」

「よろしい」

「あつ」

レオンのデコにピンッと細い指を当て、意外と痛かったらしく、レオンはデコを押さえる。

「明日も誘うから、レオンは家にいなさい。お父さんと一緒にね」

父親と一緒にの意味がいまいち、分からなかったがレオンは納得した。

「わかったー」

碧は頭をグシグシと撫で、箒に跨がりふわりと宙に浮く。

「また、明日ね。レオン」

「うんー!!」

そう言つと碧は暁の空に消えていく。

初めて体験した魔法に感銘を受けるばかりだった。

疲れながら家路についた時、母親は夕食を作って父親は家でテレビを見ている。

帰って来た時、母親や父親に何か言われた気がするが、疲れきって適当に流すだけ。

遊び疲れ風呂も夕食もとらずにベッドの中で、深い眠りに墜ちる。

次の日の朝。

空は曇り小雨がポツポツと降り気温は少し低かった。

「あつ!!」

仕事の時間をはるかに寝坊し、レオンは大急ぎで作業着を着がえる。

## 情性 7

作業着を着る中でレオンは気づいた事があった

（母さんが起こしに来てない??）

レオンにとっての目覚まし時計が、今日に限って来なかったのだ。

普通、牧場の仕事は雨の日だろうがやるはずなのに起こしにこない

「……………」

モヤモヤした不審な気持ちを胸に抱きながら、急々と階段を降りていく。

階段から降りると、静けさに不審が高まる。

「母さん!!」

何の反応もない。

ただ、レオンの声だけが無機質に反響しただけ。

B級心霊映画のようなプレッシャーが自然にレオンの背中を押す。

歩を進めると割れた皿、そして、紅い水滴…

神経質に整理整頓されていた家は、所々破損していて明らかに空巢のやるレベルではない。

また、高鳴る心音踊らせながら、歩を進める。

「……ッ!」

瞳の奥に広がる非日常。

「…か、か、母さ、ん…ッ!」

真っ赤な、真っ赤なそれは、まるでジャムのような。

驚愕は隠せない

流れ出る真つ赤な臓器。

蝶が羽根を開いているような血の広がり。

「うそ……だ」

切り裂かれ臓器の一部が飛び出し、顔は原型を留めないままにぐちゃぐちゃに。

服を破られ半裸の状態で強姦されていた

視界は白く、沈黙が続く。

慟哭よりも絶望が呼ぶ。

自分にそしてこの世界に。

（嘘だ……）

驚愕のあまり腰は砕かれ、パクパクと訳の分からない言葉を呟く。

ガチャ ガチャ

すると、無機質な音が鳴る。

## 情性 8

（誰かいる…？）

耳を澄まして聞く。

少しずつ、少しずつ、近づいて来るのが分かる

過呼吸気味な呼吸。

胸に手を当てれば、心拍数が上がるのが丸わかり。

近づく音を見る

「…ッ！…！！」

声にならない

あり得ない出来事に言葉を発せれない。

まるで、一時的に声帯が潰れたような不快感が脳に伝わる。

足音の正体は父親。

いや、元父親というべきだろうか

今の、父親の状態はとても人間とは言える状態では100%ない

半分以上、狼のように豹変している。

見るからに、化け物と形容される部類に入るものだった。

(うそだ………父さんが………)

心拍数が更に上がり、動悸も激しい。

口を手で必死に押さえ気付かれないように声を押し殺す

しかし、化け物は早くも存在に気付く。

早歩きで目の前に現れたのだ

父親の目は狂喜に満ち溢れ、以前の面影は右半身しか残っていない。

(い、い、る…さ…れる…)

本当の意味の恐怖という感情が、目覚める。

全身には脂汗が流れ瞳から涙が溢れる。

全身はカタカタと震えが止まらない

「があるあ……!!!!」

化け物は大きな爪でゆっくりとレオンの顔をなぞり爪は一度左眼に止まった

「と、……さん、や……めて」

「がるあああああああああああああああああ」

「あああああああああああああ!!」

## 情性 9

おびただしい紅い鮮血が顔中に広がり、痛みが絶望を教え痺れが生命の絶縁を知らせた。

「左、眼があああ！」

左目を押さえ声にならない叫びでもがき苦しみ意識は真っ黒な闇に沈む。

薄れる意識の中。母の亡骸が目に入る。

母親のようにぐちゃぐちゃの死体にされる。

そんな、死への不安だけが脳裏をよぎる。

化け物はレオンの首を片手であっさり掴み上げ、大きなまがまがい口がガバツと開き喰い殺そうとした。

不安がレオンを隔絶した刹那

「我の手に集いし光の閃光よ悪しき闇を切り裂き拒絶せよ！」『セントエルモの光』」

左眼をおさえながら、見た世界は啞然の一言では許してはくれなかった。

目の前に現れた女性は手を前に突き出す。

そこからは、魔法陣が広がり淡い光りの光弾を飛ばす。

光弾は横つ腹と顔に当り衝撃で壁まで飛ぶ。

「があるあ！！！！」

化け物はその場から唸りながら逃げていき、レオンは崩れるように倒れこんだ。

「ちい、逃がしたか」

「み、ど．．．りさん？」

いつものやさしい顔をした女性ではない。

「ッ！！！」

先程の光弾を向けられた。

何故？

「じろす・・・の」

「そうよ。それが私の任務なもの」

碧の手に溜る光弾は輝きが増す。

「・・・ぼく」

「？」

「．．．ともだが．．．いなくて、いつも遠屈でさびしかったんだ．．．碧さんは．．．どうだった」

光は弱まり、碧は唇をかみしめる。

「答えなさい！！死か？それとも．．．」

「．．．碧さんと．．．いたい．．．」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7264i/>

---

ゼロから始まるアラストル～処刑詩

2010年10月10日12時03分発行